藩鑑巻之百七十一目録

ト部二十七

戸川肥後守藤原達安

藩鑑巻之百七十一

戸川肥後守藤原達安

一 慶長五年六月上杉景勝謀叛よりて
御退治として
内府公京都にて御出馬あり奥州に
向ひ給ふ東海道北陸道四国中国
まて大名小名下向し浮田左京亮詮

家名代として奥州へおもむく兵
として肥後守花房助兵衛同弥左衛門
供奉出向かる秘密として石田治部
少輔三成謀叛に与し濃州へ
出張のよし注進あり家康公いそく
班師して
内府は西方へ御発向あるよし定り
令家下向の大小名の先陣として

先手は金森福島左衛門大夫田中
筑後守細川越中守加藤左馬助黒田
甲斐守池田三左衛門等一組として肥
後守も一同にて先登を心かけ既
人通塞として僅の小勢引具し黒田
甲州列して取り立てし頃へ入らせしに
後として出陣あれ花房助兵衛も肥後
守同前なれば猶則として其年なりけり 戸川 肥後

一
慶長九年七月晦日生駒讃岐
守一正蜂須賀阿波守至鎮に諭
相しられに参府もなくことに及はれ
友人の父生駒雅楽頭親正蜂須賀家
政入道蓬庵大坂にありて城從に
與しけに依りけるに至鎮一正は留
く関東にありしかは家は子孫に右京亮
成正に付秋濤達安もありし事共

多く秀家か臣是非なきハ秀家へ通
せしこともありしハ至鎮よりも同しく
留主居へつかはしには家にある後には蜂須賀
蓬庵生駒親正より右其子至鎮一正
二人ハ城從に應り留めらるゝや事
と畢竟一旦彼徒に與し兵を出して
ありしなりけり
内府聞召し異心なき旨を使

と云ふ者と二人連にて吉春の宅に来
多戸川も呉公なきの上首部下有り
来りて之より許容得ずして右警言に
歎し早毒多八服薬出来ざりし後右
しとなん 此日小山にて発狂して其川ニ

一 九月東方諸大名の先陣ヲ限
小川殿の合戦なりしら勝ちて後
田中潤吉の右肩に深手受けて死す

三丘城ヲ福嶋右京大夫にて攻落し
郷戸呂久の陣へ押寄せ陣を取りて
翌日未明に田中黒田細川蜂須賀
戸川宇喜多同道し福嶋正則方へ参る
正則只今起たる躰にて東京にて着
し出して早くも出しての様子にて右曰
く今日川を渡りてかかる大事なれば
く見えぬ相談す気色なり 正則

いとく金吾秀秋裏切より小早混
今ましくは川を渡さすといふに先角一
銭行きへさやしと云に左馬助いうて川を
渡りてといふは我一人へまつしに五銭ふ
へきしなり黒田長政同しく事かり
何ましと思ひ正刹其故なさいてい
勢こと出にて一しし山陣は石田しにて今元
鋒は如夜左馬助のこと遠ることあり嘉

明日ふくく諸士とく奥へ入合ふりきやく
繋居ゆし我夜のまゝにゆく朝具居志
さてめ眉ゝりし其議定居きゝて飛後寺
後藤又兵衛直に川端に役渡りロの所に
定む後藤いさゝく長政に云てまゝ一し
甚同同しく御待後へしと云てて役待つまて
あゝまして飛後寺川に来て入家へてしも
渡しまて渡藤も帰り来てありて大纉

て後より見るより惣勢一同に川を越て敵
多くは引退く者を追掛て是を
討の肥後者一番に鎗を合せ敵思ひ
切て討死の跡に取り組所に田中
吉政の士も早見して鎗を持て肥後者を
組りて心掛け中にしてありて掛る敵
十文字の鎗を持てきたりし商
き所に居て二本の鎗を構へ持て

る入て見れは田中か足軽にして討
つきよりしとりて右の田中か士怒りて
討負ふとて辛度に討をとらんは我か
と突殺さんとしけるに敵云様に少
し待てとて肥後者陸兵ハ身か入まして
倒したる田中か士しかしく急ぎ掛り
此首ハて下さまへいしとりふかく遣ハさて
つきよりしと云て立去ぬ戸川文左衛門

能と合せしといへどもかなしかりき大き
小勝とたり進彦助十郎後助左衛門と云ふ十
六歳にて組討して首を取し事七箇
所首を取りて前に花々働きけり黒
田甲州も名は聞ゆ飛騨守に仕へけるは
彼は小兒の時よりよく知りたり若年にて
手柄度々ありしとて御褒美を下されし
に首を取りけるつきやうな人

と申して送りけるに福島は田中にて
聞きて御縁ありとて岸本兵
部能登とも同じく治右衛門能と
らさしてとて五十余人合せる有様
多くありて左近飛騨守名のきこえ
と問ひ尋ねける是非と止めず事に誠合いて
うるしき中にてしたると大に誉めし
なり飛騨守朝鮮にても一人にて

掛りし是にて切りにて何れも一の陣より自分
くしたつきは己よりみえし人数持もの軍
の事を忘ます人と仕いし勝利となりて
も何もなかりしのもしいつきとかく人家人
小ませたるか能しかしき今ない浪人か
わかく人おかなる少く自分もしらさに高名
ともるなかりしとて 戸川家語

一 戸川肥後守関東陣之きいは備方と浪人
しゝ関東よ向をけまいは出陣も小勢な
まいは自分のもしらさ多くし御戸口久の
渡りしにて早く川を渡しても鉄炮敵に
進みし消えけるを時の一番首なりいつき
ろくもし能くて合をときは田中合戦 与部少伸
の兵卒ろくし取勇すもし云く時なかりく
かくはかくよりて進き来たることを敵は十文字
と槍かかし高きを下より成か二本

の銘を掘に実合にして其名かかりし々
田中の名艶なりきこえしかは侠艶として打
かしこりし小田中の侍怒りて此侠艶をて
打んとせしを打はねとまつ実殺せ
らしこりし小坊主殺の首の下へ飛脚する
銘を実のかしら実例とて田中の侍その
首をとる（其の飛脚ある首は右田の内川福永某　備前事記）

一 郷戸は川端に遣る者のうち内にの

上意によりて肥後守より明石掃部へ状
を遣はし秀家に此儀を忠をて申
つかし候に存し其は西方の利運に
味方つかし候はあらて此家大事によは色
見すや遣はし返すきくのち此腹
切へきむるを上意として大坂の報をつ
もしもし遣はしたる状の案は廻漏状と
なりてあるは明石掃部秀家の家老にて

ハ兼く出させまくしすまる我も勝利ハあ
るまじきとたり共様きこしも武士道ハ
いひ合ましし上ハ討死せらくきしとの存念な
かりしる処ありし勝ともならしめ犯隠る
隠るるより中より小身なる我備あかしハ
秀家ハいさ縁をらむしとし謀殺させ
りしまうる浮田既家滅亡ハ惜しき
事なりしといへり　浮田家譜

一　九月十五日
内府公着陣ありて備揃一通りすまして
ゆへ切崩せと金吾秀秋裏切して
大谷刑部少輔を討ち西軍残りなく
なく惣崩して伊吹山ハ大方逃也る
落集しける人衆を云ふへきかめく
海道を通りて退きける落人是を殺こ
小従はし行者ハ大勢にして公やとく

ハうけける紀湊まての者ともハ初より見え
めのこしける故左馬助先手として備
小備陣ゟ横山へおしよせ石田か兵
家士六七十騎を冊して渡り一同に突かゝ
出左馬助勢左右に開き挟み包み
一人も洩さす討取りける時ハ惣勢とし
備へし援落ハ討るへしとて見れハ
見るうちも見ころしにする討留やうに

何れも欺かれ候ひしニ一戦ハ談合して
出し我陣ゟ押立て息子近藤
引て家人右の外数多討取て近失ぬ
時に大将ハ諸方より説おり聞
来給ひ伏和山まて紀伊守か着陣一同
無り勝ちけり 岩崎兵右衛門甲一列なる
肥後守の指揮けるに名たる備にて鉄の
少々よし与右衛門ト従ふる後まての所

しおらしく不相成候　何様わけし

なり　同上

一内府公ハ入洛石田三成小西行長安国

寺を虜にして車にて京都洛中

をわたし首を刎獄門にかけ敵

したる毛利中国にて然るに領分を

毛利輝元上杉景勝佐竹義宣ハ国

を取り或いは過分のか領を下され筑

前中納言秀秋ハ備前美作ニヶ国を領し

しめ給ふ備前国にて逝去ありて死後

子浮田左京亮所領肥後守ハ備中へ

下り浪々せしに秀秋入道のことく去

人国を引渡しまして肥後守も亦木下の

高二万五千六百石備中庭瀬郷

となし下さる　同上

一内府公江戸へ御下向ありて天下の

諸大名江戸へ参勤して天下と一統
に治まり候ハ駿州府中の御遺意候
諸大名異なりし石垣ニ御付候て
非常之時も所備と文学を兼武道畢
しけるにハ
内府公駿府在城の時京都大坂の御差図
手も非常の時は諸所より注進を承り候事
首の同前、府中ニ而花之御所ニ御座

名高稲村里にて 駿府ニ治まりて
之候とて
将軍秀忠公江戸御在城ニて日本
諸大名妻子ニて引越し、其ニ家居設く
こと其吹風も枝を鳴らさぬ御代なり
十月の花後に江戸に居候と觸は拜謁
して参造仕しまして二年めには江戸へ
参府す 同上

一 秀秋備前ニ更代て領して備前岡
山ニ在城し感々暮し近国の者
ともを蔑如しく領地境目ろ不分
明ニ付て肥後ろ間ニかろしつゝ
其秀秋家老ニ杉わらく成人ニ
退しき内稲葉内道作ニ退しいて
き肥後ろニて頼まてにうわ掛り
しつてひきいろへいきしに定めにかうき

屋瀬採知して構えと掛け桐木にて
用ニしく鉄しいき支度ニそいたこれは
隣国家の武道ニ而て底ニて飫多合切
しても今も出ける人しも知しいふ
ものゝ五十人小者ニけりまいい若党かれ
ニより折懐まんし敵なるしに中ニ
たやすくハ知るましきとして思ハゝし
りうきて内通ニ退しくしときに池田市

右馬の小森三河守盛にし以て我人二人
足軽五十人とて従へ境目の如しさき
向にし以て橋まで出迎へ川九ら庭
瀬にまちしてき閃道作赤して候
おぼえ候らはぬ直に急に入にさして使者
約し飛脚所より出て番屋にしこして
則ち従ト康井より船にて上京とそ云々
其後我秋より関へ入ありし通不なり

當老なり　憑思召にあひて御出入ア
まつ小川足後庵瀬へ飛状にて御返事
行しときは古文字に力にて下すとき飛脚よ
より通天し名をとくに馬関に来りて能のして
ことを備へて立しもて様子ありしは則ち案
降りし駿馬にし遂に足あらは馬まいらせ
進上とて其後は則ちて御返り飛脚より片
戸川の水若年来りて御供り傳分よ

それもほとなく秀秋卒去して跡絶
えけるの後池田輝政備前の領主となる
又元和年中に至りて此ちをつかはされけれハ猶以く
の繁昌なりけり 同上

一 慶長十九年大坂変事出来の
とき片桐市正蔵本城を擁離る大
坂より出奔せしより世変起りて風
説さまさまなりしかハ三日飛脚を駿府へ下

さしむ其所へ聞ありて京都よりいく
板倉伊賀守方へ注進けれハ不日に伏見
伊賀守宣ハ片桐市正蔵本城を離
るゝ大坂より攻へきよし風説あるよ
加賀の事とて申継をしこたし飛脚を進く
いとしく常の参勤の帰りしたしく歩かハ
なへとも蔵本ハ加賀に急かつきしや否や
州大千歳山河流石紀州寺持合

るやうなりし御勢ひにちかくハ茨木落因、
なりつゝ一振誂へくかよふしなり片桐
茨木にはなれて東市正かくはかりしとて
東市正大かた悦ひ則ち楽の前に大
手須ヶ星の御陣して日運の
も大坂より寄手しらさるしやくに
極りけまいは立もと帰りける　同上

一　戸川肥後守達安慶長十九年十六夜
御陣のときに中備の内海老白にとも
いらく我は軍功としけまし敵を討
志ちのこゝ知りて天満口肥田福島の二
陣下とせんとす
大薩摩笠ヶ石及たしまし御感をかうふり
且御はいらく敵軍おほき不小勝へに
以くかほこいつしかうんとて則ち浅野
但馬守長晟に厳命をとくし治人

く浅野但馬に加増にたまはる　寛永落
一慶長二十年改元ありて元和元年と
なる
両御所様正月末つ江戸へ下向ありけり
然るに大坂にて和睦破れ同三月
又陣触ありて出陣あるへきよし
にて四月諸大名急ぎ上着にて
両御所様四月末つ上着ありて同廿

紀伊守尼崎の番に仰付られし　飛騨守
備中退隠しも尼崎の加番にと仰
付られ各彼所に在陣ありて當家へ寄
せ来る人々にて通されて五月初より諸勢
大和口より押寄て國分道明寺村
にて陣をとる五月六日
當方両様の舊にて出て小合戦あり
まつ同七日根来明けし紀伊守船にて

木津口ハ遠ハしし合戦の様子とも見
及ハらやく候ふへきよしにて小松と
遠ハしやきの合戦ハ子最中に候けれ
相手ハ何方之臣進中事ニ任候ふ
ありふハ乃旗本一公之なく急めこし
あるハ乃方にて討死して忠義にて子
孫に遺さへしと目ころもやきいま
うやしの乃厄難もし何ることも為し

おかハ尼か詠かとく松平宮内少輔へと
廻しくけるく花房助兵衛としし合せ天
王寺表へ出し之有大坂陣に火を掛て
無體協く乗こたし乃旗本茶臼山へ乗
り興巻陣中と也しへ上乃目見しやしよる
聖済る道をやしくいてく尼か詠ハ書に
傳ならむしといへとも乃旗本色えな
く有し奉り推参仕りけしにほとりきまハ

何こ尼ヶ崎しに御殿へまかりて御機嫌よろし
花房助之進乗物を舁もとへ出して伺ひに
夜〻にさし助之進氣のよろしきを上る御覧
何かと汝者さとききやうにすききやうへ
無かりし處御時よの御言ありしに兵法助
之進股肱臣と辞しにより此御褒美に下
東へ偏に貴殿の御親ありけると云
忘まろうしに老後の面目存へ

なりまするにへやとして悦ひけるとなり
大樹君御赤云ふ岡山に御在陣なりし御目
見申上尼ヶ崎は御事に候（尼ヶ崎家譜）

一 兵庫大坂方出生御儀ありて晴石
掃部頭先と知られて岡戦奇ある（浅野家譜）
嫡子平内（浅野家譜）掃部と平家なり戦前
この家傳によりて平内は不和となり
て戦前方と出して流浪して今家掃

於大坂へ籠城につき平内も無に
入り京都にて大事の覚悟何れ候
また一所の者の如し平内鉄斎と内通
の事ありまへさきし長子上京なり内に
鉄斎も父子とも不通仕りしことは歴然
なし中に内通何れもしきりにやする
の模様ありしくの思ひ出にや別りこしと
何らは海も同心して上京なし中に於て

とつくハヤ上京すべき所ありしかやうの
上意のみにての別れよりてこまかくかの京
と存じ候て隠々に混候のうく鉄斎ハ所に
代し肥後ぎいハ初中後内意ハ存せられし混
くやむなう別に候なく叶はやうに　強
まきたるゆへ隠して以上おつくし　中殿
府に俟し有おハの遺言の所存増もあり
また仕りてなり　鉄斎并平内にも尋

出しゆへにかくし哉方々も修行に
る平門ハ備中の家人伊賀已所をたのミ
りふ音寝床の下に穴を掘て大物結
付して隠しをき召使の下女もしらて
しなり六月末に成りて哉方身上危き
ことを平門家へ出訴に征伐を許り七日
妙顕寺にて哉方切腹して平門ハ
宗門によりて請して切らる哉方か

一
二男忠右衛門といふもの申付しによりて
下京に居候ところ切捨宗門をあらため
まゝ順白病死ハ耶蘇にてなき勤ハ半天
連綿唆を悪しミ強くして征伐を仰付
らるゝ西ハ九州東ハ関東まても尋ねさせ
しも終に生れさる者の知し南蛮へ
渡りしと沙汰あり　同上

一 元和二年四月十七日

家康公の代となりて駿府に隠居
したまふ時にはつねに勤仕して
秀忠公の御代となりていよいよ天下平
かになりしかは静謐なりけれは元和五年夏の
上洛あり福嶋左衛門大夫正則領國にて
不上らしたまひし家臣福嶋丹波預りしは
にはかなりしかは中山四位の大名数万
騎安藝の廣嶋へ發向のときに安藝守

馬も水井右近大夫尚政ともに三年計
としてく出陣して四國の諸大名案内
なりしを安藝ハ水井安藝人ハ御先中なりし
其武功になしてもいつもなり体となさ
くの役人なり加度左馬助嘉明子息
さと作法り左馬助上ハ正則属して
居中なして家来として兵ハ私一人にて
てもまりとてものし御出立

從しも出るに及はす合戦の構へ拵る
一左右にて相待城内中も用意しく
くもしらきに死をへきとして一家中一同ニ
伏見より花房志摩守に上使として
江戸へ下向して福嶋公腹して此旨
とり上け城を渡し信州高井郡村ニ移
右ニて 此の右を下され 正則より家中諸侍へ申渡して
つきより一札を遣はして丹波をもって

城を渡し一家中退散して諸大名預
国なり 右川家譜 右家譜並諸記

一 元和九年
秀忠公御上洛
家光公同しく御上洛に而上洛征夷
大将軍に任官位昇進あり
秀忠公ハ家光公へ御譲あり
宝蔵にて上覧あり飛驒守御供仕る

弟子十八名の内其一人なり是学問
ありしと然とも後又なりしとなり肥後
か壮年より書を修ニ東福寺和尚と
語らひ道春もよく知りて傳り
肥後守武勇功有一世之上古之輩也
是によりて当地に於て諸しく肥後に在
の時ふとき茂堂和尚か弟子古葛助
丹波か所在葛之事又肥後へ来る其

民部少輔谷出羽守付肥後守二好
因幡守杉本下麿とかくして二年一緒つゝ
兵部守古くはしし其為のしらさい大方肥後
支へと上京是わりしかくし戸川熊谷

一 寛永三年比二らつ肥後守へ御下屋
敷語まとりへこれしも其語中の話もし
然又しとき寛永十年卯年十六
病とらけ摩語まゆくとととしの上

侍大醫元作（なりしときに）へも勝なし
然るに十二月廿五日肥後守六十一歳にて
死去せし法名は不變院覺如居士と
いふ武州池上に葬る惣領は次男市蔵
正安（後に伊予守と號せし）に譲りて次の子ニノ川内
蔵助に高三千石を分ち与へて土佐守
二男二千五百石其外子供多くし女
子もまし似合ニ高をもつて傳し遣はされ

此儀に出たる（ハ書記にあれ）肥後守道見とて殊に月利あり
精上る遣ひは中々及ばずして花中
召使人は中式は親類出入の者もまして子の
行々までも迷惑なし後道見ことしくく（遣はされ[illegible]上）

内閣文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan